

「人の目を／盗んで進む／カレンダー」岡部 征峻（北海道）
どこか愉快にかんじられるのは人間のコントロールの外のことは人間にはもう関与できないからでしよう。ユーモアの正体は恐怖ということがわかる気がします。

「手と闇に違いは無くて虫当たる」詩央えみる（大阪府）
「違い」がないのは闇が人間を簡単にのみこんでしまっているからかもしませんが、虫から見たら当たり前ですがそんなことはどうでもよいことですね。なんとなく虫のひとり勝ちという感じがして面白く読みました。

「十月の森に入ればわたしだけ／映つてしない静かな鏡」常田 瑛子（山口県）
喻ではないかも知れない、と思わせる力があります。もし自分が幽霊だと知るようなことがあつたら、その孤独に耐えられるかわかりません。

「陰謀論きらきらしくて鳥の街」桜庭 紀子（和歌山県）
「きらきらしくて」の造語が陰謀論の表層的なかがやきを絶妙に暴いています。卓抜してします。

「夕焼けは夕焼けの子を食うだろう」千葉羅点（愛媛県）
「夕焼けの子」の実体はわかりませんが、言外に夕焼けが強烈に描かれており、ほんとうに食うぞ、という迫力を生み出しています。

「ハッピーデーの轍が／風に揺れている／きみはどうしてるかなと思う」福山るか（埼玉県）
轍の揺れによって目に見えない風の存在が明示されています。目に見えない心もまた明示されています。「揺れ」とは言葉であり、心のことである、と教えてもらいました。

「かき氷くずしてゆけば／夕闇に／こどもの増える／甘いみずうみ」石村 まい（兵庫県）
「こどもの増える」という言葉の先に「甘いみずうみ」があるのが怖いですね。言葉の並びが、たしかに一つのリアルな地勢をかたちづくっています。

「手に掬う水に母ある今朝の秋」鶯浦 るか（富山県）
水は循環する命ですが、ここでは手に掬った水面に映る自身の貌のなかに「母」がいます。秋の朝という少し引き締まってきた空気もこのワンシーンをたしかなものとして支えています。

「あなたにも怖い木目があつたなら／話してもいい埋葬のこと」夏山 葉（東京都）
では話しますと、昔、教室の後ろの木製ロッカーの木目に人の顔が浮かんだ！と言つてクラスメイトが卒倒し、それをきっかけに教室全体がパニックになつて、結果、一学年11クラスのマンモス校の全校生徒が緊急下校となつたことがありました。木目は怖いです。

「並べると／背骨にみえるマシュマロを／焼いて溶かしてうまれるけもの」にわ（栃木県）
マシュマロとけものという性質的に遠いものを結び合させているところがよいです。視覚
は意外と信用できませんので、独自の調合で、現実を見ようとします。

「かたちより香りのために持ち帰る／すずらんすずらん／笑わせないで」 牧角うら（東京
都）

ある関係性のなかでの言葉が交わされていて、その一部だけがこちらに見えている状態で
す。だから意味はわかりませんが、意味以上のものが濃厚に漂っています。否定されても
なおも際立つてくる「すずらんすずらん」のかたちがとても豊かです。

「つめたさが／まぶたに触れたとき／すこしかたくて／それが雪だとわかる」村川愉季（東
京都）

雪のてぐたえをつかんだ稀有なことば。冷たさにもかたちがあり、雪のようなおもみに抗
つてまぶたをひらく。そこにはどんな光景がひろがっているのでしょうか。

次回も楽しみにお待ちしています。